

アラブ諸国の水中文化遺産保護体制

佐々木 蘭貞*

Underwater Cultural Heritage Protection Regimes in Arab Countries

Randy SASAKI*

キーワード：水中考古学、ユネスコ水中文化遺産保護条約、文化遺産保護、国際協力

Keywords: Underwater Archaeology, UNESCO Convention on the Protection of the Underwater Cultural Heritage, Protection of Cultural Heritage, International Collaboration

1. はじめに

アラブ諸国は、大西洋・地中海・紅海・インド洋・アラビア湾など環境の異なる大きな海域を含み、海岸線延長は3万 km を超える。歴史も海との繋がりが深く、海を越えた交易が盛んであった。イスラム商人の海での活躍は、『千夜一夜物語』などにも見られ、オマーンのようにザンジバルなどアフリカ東海岸地域との交流を長く続けてきた国もある。古くは『エリュトラー海案内記』にもインド洋の交易の様子が描かれ、数千年におよぶ海事文化の歴史は脈々と受け継がれてきたことが分かる。人類の海上での活躍は、水中遺跡という形で残されており、水中考古学研究・水中文化遺産の調査が過去の実業文化の解明に大きく貢献している。近年、アラブ諸国では特に国際的な枠組みの中で水中文化遺産を保護する取り組みが積極的に行われている。

その国際的な取り組みとして、ユネスコ水中文化遺産保護条約（The Convention on the Protection of the Underwater Cultural Heritage、以下ユネスコ条約）がよく知られている。2001 年 11 月のユネスコ総会で採択された、水中文化遺産の保護を目的とした国際条約である（UNESCO 2001）。2023 年 11 月 30 日時点では 76 か国が加盟している。アラブ諸国 19 か国中、批准していない国は 4 か国となった。アジア地域からユネスコ条約に批准している国はイランとカンボジア 2 か国のみであることを考えると、世界の中でもアラブ諸国は水中文化遺産の保護に積極的に取り組んでいる地域であると言える。各国の水中文化遺産保護の取り組みに対する進捗の指標となる項目を表1にまとめた。国内での専門教育のためのトレーニングや大学での教育の有無、海外の研究機関と共同研究事業を実施しているか、国内の研究者が主体となったプロジェクトの有無、専門家が国内で育っているか、水中文化遺産を担当する専門の部署が政府組織内にあるか、ユネスコ水中文化遺産保護条約の批准についての

評価を示している。

一方、日本国内で広く一般に知られたアラブ諸国の考古学のイメージは砂漠に埋もれた都市などの発掘であり、海事文化を感じさせる要素は多くない。そのためか、日本では専門家の間でもアラブ諸国の水中考古学の研究や水中文化遺産保護の取り組みについてはあまり知られていない。急速に進む水中文化遺産保護の取り組みを紹介する必要があると考え、本稿の執筆にあたった。各国の水中考古学研究の歩みや代表的な遺跡を示し、現在の遺跡保護体制、最新の動向を紹介する（アルファベット順）。

本稿でユネスコ条約について度々言及するため、条約の主な内容を以下に短くまとめる。主な内容として、1) 開発などの人為的な行為や自然災害などにより水中文化遺産が破壊されないようそれぞれの国が責任をもって遺産を守るための体制の整備、2) 計画性のない引き揚げに対する遺跡の現地保存の徹底、3) 市民への情報提供など活用に重点を置いた文化遺産政策の推奨、4) 国際橋梁事業を前提とし、排他的経済水域や公海における文化遺産保護の在り方を明確にすること、などを挙げることができる（Maarleveld et al. eds. 2013）。

2. 各国の取り組み

(1) 西アジア

バハレーン

ペルシャ湾の島国であり、海事文化の理解は国の歴史理解に重要な意味を成すと考えられる。政府の取り組みは積極的ではあるが、1993 年のテキサス A & M 大学による簡易的な探査（Pedersen 2015）以外は、ほとんど調査事例がなく、また、水中遺跡発掘の事例も知られていない。政府の取り組みとしては、2012 年に行われた湾岸諸国ユネスコ水中文化遺産保護条約会議の 1 回目の主催国として名乗りを上げたことが特

表1 アラブ諸国の水中文化遺産保護の取り組み一覧表

地域	西アジア												北アフリカ						
国名	バハレーン	イラク	ヨルダン	クウェート	レバノン	オマーン	パレスチナ	カタール	サウジアラビア	シリア	イエメン	アラブ首長国連邦	アルジェリア	エジプト	リビア	モーリタニア	モロッコ	スーダン	チュニジア
国内教育・トレーニング	×	×	○	○	○	△	×	×	△	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○
海外協力プロジェクト	○	△	○	△	○	○	×	△	○	△	△	○	○	○	△	×	○	△	○
独自プロジェクト	×	×	○	×	○	△	×	×	○	×	×	×	○	○	△	×	○	×	○
専門家	×	×	△	×	○	○	×	○	○	×	○	×	○	○	○	×	○	×	○
管轄組織（国立）	○	△	○	△	○	○	○	△	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	○
ユネスコ条約批准	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	×	○

○：存在または実施している。×：存在または実施していない。△：過去に存在・実施した、機能していない。もしくは、計画が示されている。ユネスコ条約は、○＝批准、×＝未批准

筆にあたる。ユネスコが国内の研究者で水中遺跡に係る諸問題に対応できる体制を作ること、いわゆるキャパシティ・ビルディングをひとつの重要な課題としてしていることを受け、会議では湾岸諸国各国において文化遺産担当者のトレーニングや大学における教育プログラムなどを立ち上げる必要があることが確認された。さらに2014年には条約を批准し、職員をユネスコ・トレーニングコースに派遣している。沿岸部に存在する水中文化遺産のマネージメント、また、国内研究者による遺跡調査手法の確立を目標に専門家の協力を要請しているが、現在のところ国内でキャパシティ・ビルディングのプログラムが実施された例はない（Khalil 2021: 12）。

バハレーンの周囲の海底は、厚い砂の堆積が見られるため、多くの遺跡は深く埋もれている可能性が高い。埋もれた遺跡を発見するための手法（サブボトム・プロファイラなど）を採用する必要があるが、データを読み解くには高度な専門知識を必要とするなど課題が残されている。幸い、政府関係機関内ではアセスメントの必要性と水中文化遺産研究の将来性を見出しており、今後の進展に期待を持って見守る必要がある。政府は専門家などの力を借りて国内調査を充実させていきたい考えもある（図1）。また、政府はダイビング観光のプロモーションを実施している¹⁾。一般的にダイビングが盛んになればそれだけ遺跡発見の可能性も増えるため、今後のダイビング産業の盛り上がりも注視したい。

イラク

国内情勢が長らく不安定であったことから、水中文化遺産保護の取り組みは進んでおらず、また、イラク国内の実態がつかみにくい状況にあった（Khalil 2021: 13）。しかし、2023年11月に突然ユネスコ条約

批准に至っている。個人的な推測ではあるが、2022年にニュース記事などで話題となったティグリス川に沈んでいた3400年前のミタンニの都市の発見（Cable News Network 2022）が批准を後押ししたのではないかと推測される。イラクの水中発掘は、古くは日本とのつながりがある。1855年、フランス発掘隊が本国に持ち帰るために運んでいた遺物を載せた船がクルナ（Qurna）付近で沈没した、いわゆる「クルナの災難」と呼ばれる事件がある。1970年代には、日本オリエント学会が江上波夫を調査団長として、クルナの沈没船や失われた遺物の探査を実施したが、発見することはできなかった（高野・松村編 2000: 19-21）。

ヨルダン

2009年にユネスコ条約を批准しており、比較的に早くから水中文化遺産の保護に取り組む姿勢を見せている。2020年にエジプトで実施されたユネスコのトレーニングプログラムにも参加しており、地域の中で積極的に影響力を高めている。なお、このトレーニングには、ヨルダンと開催国のエジプトのほか、アルジェリア、レバノン、モロッコ、オマーン、スーダン、チュニジア（計8か国）が参加している（Alexandria Centre for Maritime Archaeology and Underwater Cultural Heritage 2020）。ヨルダンで「海」といえば、死海が思いつく。イスラエルの研究者によると、1960年代をピークに死海の水位が下がっており、陸地化された港跡や少し沖には投錨地などを確認している（Oron et al. 2014）。ヨルダン側にも同様に湖底遺跡が残されているだろうが、調査事例は聞かない。ヨルダンには死海のほか、海岸線延長26kmのアカバ湾がある。他には海がないため、アカバ地方の考古学部局が国の水中文化遺産保護の管轄局として機能している。バスマ王女（Princess Basma



図1 バハレーンで実施している水中遺跡探査の様子・沈没船の一部（筆者撮影）

bint Ali) が中心となり設立された海洋保護団体 (The Royal Marine Conservation Society of Jordan) も調査を担っている (Khalil 2021: 13–14)。ウマイヤ朝からファーティマ朝にかけて使われた港湾都市アイラ (Ayla) の発掘調査が特に有名である (Al-Fakhri 2010; Eid et al. 2018)。また、ダイビング産業を盛り上げるため戦車やヘリコプターなど軍用機を沈めたアカバ海底軍事博物館が造られ話題を呼んでいる (Wonders Travel and Tourism 2023)。

クウェート

2013 から 2019 年にかけて、ワルシャワ大学がファイラカ島で実施した沿岸部の水中遺跡探査事業では複数の構造物を確認しているが、沈没船の報告はない (Ruttkay et al. eds. 2019)。クウェートでは地元の歴史学者や研究団体、また、政府内でも水中文化遺産や海事文化への関心が高いと言われている。ダイビング団体が中心になり水中文化遺産の保護や水中遺跡調査手法を紹介する活動を行っており、一般市民の間でも水中遺跡保護への理解と関心が高いようである (Khalil 2021: 14)。クウェートには海事博物館もあるが、水中遺跡に特化した展示ではない (Khalil 2023: 55)。2017 年にはユネスコ条約を批准している。トレーニングプログラムなどにも参加し、国際的な影響

力を示している。水中遺跡保護の体制も準備されており関心も高いが、実践的なプロジェクトがなく専門家がないという状況にある (Khalil 2021: 14)。

レバノン

アラブ諸国の中でも特に水中遺跡の研究が盛んな国である。2007 年にユネスコ条約を批准し、文化省の下に水中文化遺産を管理する部門を置き、国際プロジェクトへの参加など水中文化遺産保護をしっかりと進めている。現在、10 件以上の水中・水際の遺跡調査プロジェクトが進行中である (Khalil 2021: 15)。水中文化遺産調査のきっかけは 1960 年代にさかのぼり、シドン (Sidon) やビブロス (Byblos) で行われたオナー・フロスト (Honor Frost) による調査にある。レバノンだけでなくキプロス島やトルコなど東地中海地域やアラブ諸国での彼女の功績は大きく、水中考古学の母と呼ばれている (Blue 2020)。近年は、北部の港町アンフェ (Anfeh) における発見が話題となっている。周辺海域の大規模な悉皆調査でアンカーや停泊施設などを特定しており、今後の調査ではさらなる発見が期待されている。レバノンのバラマンド大学がホストとなりオナー・フロスト財団の支援を受けて実施している (Khalil 2023: 26–28)。

オマーン

アラビア湾の入り口に位置するオマーンは歴史時代を通して海洋国家として知られ、海事文化の研究や水中文化遺産の調査に対しても先進的な取り組みを続けてきた。また、海外の調査団も数多く活躍している。西オーストラリア博物館やサウスハンプトン大学の他に、鄭和の大航海の船を探す中国とのプロジェクトや、1763 年に沈没したアムステルヴェーン号 (Amstelveen) のオランダとの探査など、国際的なプロジェクトが行われている (Khalil 2021: 17)。ヴァスコ・ダ・ガマの船団エスメラルダ号 (Esmeralda) 発見のニュースは大きく報じられた (Mearns et al. 2016)。

国内の水中遺跡のマネジメントを行うため、専門のユニットが 2012 年に設立され、海外との協力体制も強化された。特に、海外との研究事業は国内の考古学者のトレーニングの機会として捉えられている。また、水中遺跡の分布調査・現状の把握に力を入れている。水中文化遺産の利害関係者や何らかの形で関わる可能性のある開発事業、漁師、国や地方の組織などにも積極的に水中文化遺産保護の取り組みの重要性を伝えるアウトリーチプログラムも行っている。海洋開発に際してはアセスメントを徹底し、新たな水中遺跡の発見に貢献している (Khalil 2021: 17)。

オマーンでは国レベルでの水中文化遺産保護の体制

は整っているが、国内で水中考古学を専門で学べる大学などが無い。国内の専門家の育成が、これからの課題であろう。民間のダイビング指導団体（PADI）が水中考古学のトレーニング・コースを設立しており、民間と国の二つのレベルでの水中文化遺産への理解が高まっていることがうかがえる（Al Boom Diving 2024）。ユネスコ条約の批准は2020年と早くはないが、国内でしっかりと水中文化遺産のマネジメントが実施されてきた良い例である。

パレスチナ

ガザ地区の全長およそ40kmの海岸の沖には多くの水中遺跡があると言われている。2011年にユネスコ条約を批准はしているが、それに即した活動は見受けられない。例えば、批准に際して水中文化遺産のマネジメントを管轄できる部門の設置や開発対応など法整備が求められているが、ユネスコの報告でも実態が伴っていないと指摘されている（Khalil 2021: 18）。当原稿を執筆中（2023年）に始まったガザ地区の戦闘により、今後の国内情勢がどう変化するか予想がつかない。アルスター大学やサウスハンプトン大学などが進めているMarEA（中東と北アフリカの消滅の危機にある海事遺跡調査プロジェクト：Maritime Endangered Archaeology）のX（旧ツイッター）には、ガザ地区の人的被害、また、水際の遺跡の被害も報告されている（MarEA_project 2023）。国内の情勢が安定した後は、専門家の育成、専門機関の設置、水中文化遺産の分布調査の実施など課題解決に向けて動きがあることを期待したい。

カタール

水中文化遺産の保護の取り組みには積極性があまり見られず、国際的なプレゼンスも決して高くはないが、海外の研究機関と水中遺跡の調査を進めてきた実績を持つ。2014年のロンドン大学が実施した探査や、2017-18年のカタール博物館、カタール大学、ヨーク大学をはじめとしたイギリスの研究機関との協力で実施した探査では複数の沈没船遺跡が発見されている（Khalil 2021: 18）。しかし、その後は国内で水中遺跡の調査が実施された例はなく、国内でキャパシティ・ビルディングなどのプログラムも開催されていない。水中考古学博物館の建設が予定されていたが、計画は中止となったようである（Schiattarella Associati 2016）。そのようななか、2023年11月にユネスコ条約に批准したとユネスコのウェブ・サイトに報告があった。批准に至った経緯については、今後調べる予定であるが、国内で新たな動きがあるのかもしれない。

サウジアラビア

ながらも水中文化遺産に対する活動の報告もほとんどなかったが、2007年ごろから政府主導による積極的な取り組み、国際協力プロジェクトも実施され注目を集めた（Khalil 2017）。サウジアラムコとサウジアラビア政府、およびヨーク大学が実施した紅海の調査、マールブルク大学の調査などが知られる（Khalil 2021: 19）。2015年にはユネスコ条約を批准している。その後に調査が進んだウムラッジ沈没船（The Umm Lajj Shipwreck）は、ユネスコ条約に沿って国内法のもとで遺跡として登録・保護し、調査が進められた遺跡であると公表された。ナポリ東洋大学とサウジアラビア政府の共同で調査に当たっている。中国産の陶磁器などが多く積まれていた18世紀後半の沈没船である。タバコのパイプなどトルコ系の日用品も発見されており、中国の船ではなく紅海周辺の交易船であるとされる（Khalil 2023: 21-23）。ちょうどエジプトのサダナ島沈没船（The Sadana Shipwreck）が同時代の沈没船であり遺物の構成も似ており（Ward 2001）、比較研究のできる遺跡であろう。

2020年、サウジアラビア政府は水中文化遺産調査・保護の世界トップレベルの組織として国立の水中考古学センターの設立を宣言し、それまでの海外と協力して調査を行うスタイルから徐々に脱却し、自国で水中文化遺産のマネジメントを目指すという方針を打ち出した（Nugali 2020）。2022年には、文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）とイタリア政府が組織したトレーニング・プログラムを実施（ICCROM 2022）、着実に地域のリーダーとしての実績を積み準備を整えている。サウジアラビア政府は紅海のリゾート開発に伴う事前調査で発見された遺跡の調査、海事博物館の建設などを進めている（Arab News 2021）。

シリア

過去には日本の調査隊も遺跡発掘を行っている。江上波夫を委員長とした「シリア沖古代遺跡発掘運営委員会」が組織され、シリア考古総局との共同調査が実施された。発掘調査には田辺昭三が指導に当たっている（高野・松村編 2000: 19-21）。シリア国内では、水中遺跡調査の機運が高まりつつあったが、国内情勢が不安定となり、順調な発展を妨げている。そのような中、2017年にウルスター大学とサウスハンプトン大学が航空・衛星写真や既存の海洋データ・探査資料から水中遺跡の分布を割り出し、GISにまとめるプロジェクトを行っている（Westley et al. 2022）。また、セバストーポリ大学を中心に、ロシア・シリア国際プロジェクトが発足し、2019年にはフィールドワークが実施されている（図2）（Lebedinski et al.

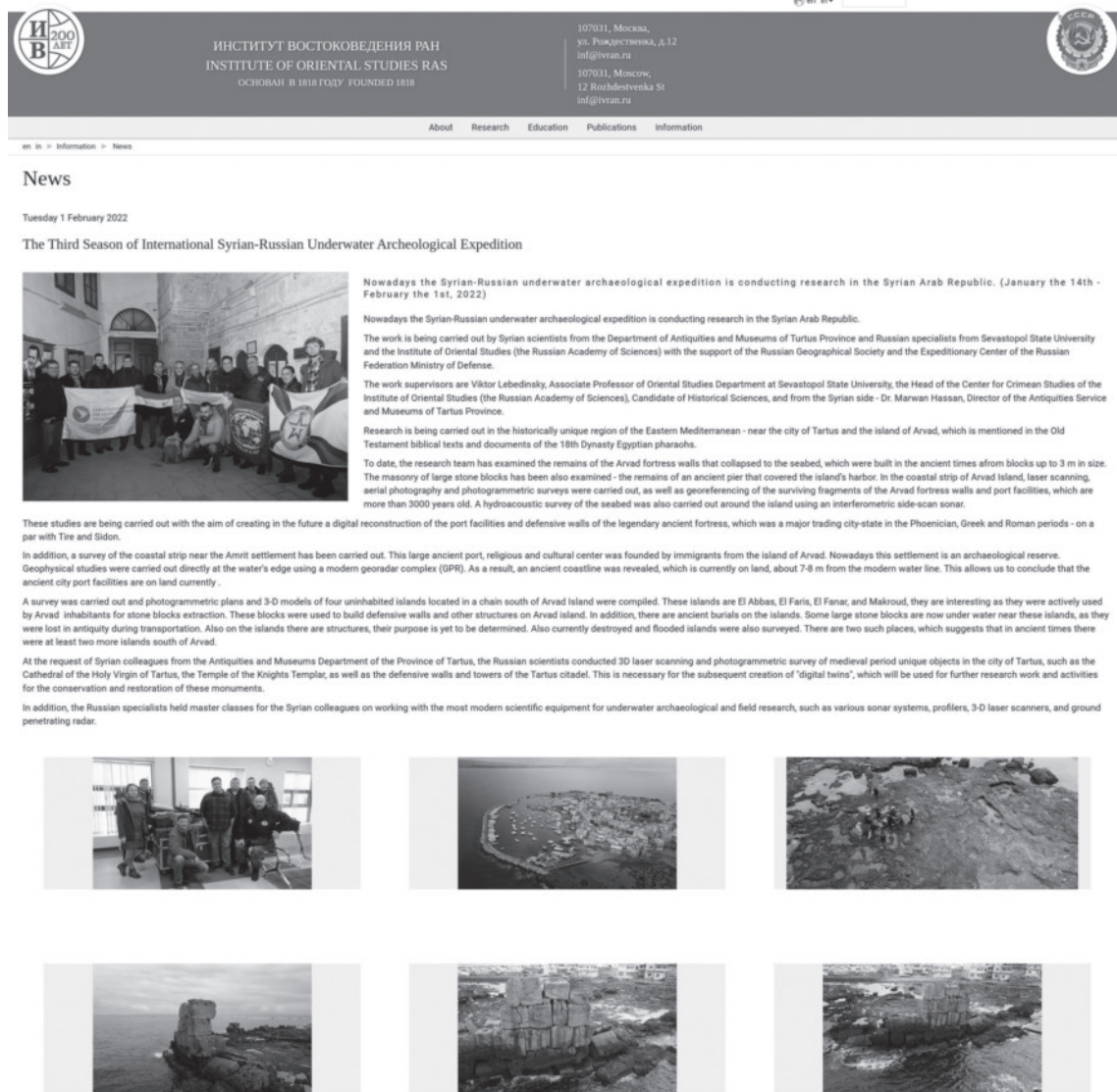


図2 シリア・ロシア合同調査のニュース報道・インターネット記事 (The Institute of Oriental Studies of the Russian Academy of Sciences 2022)

2020)。国内には専門家もおらず、トレーニングも行われていない。しかし、オーナー・フロスト財団などの支援を受け、海外の大学院で水中考古学を専門で学んでいる学生が数名おり、今後、国内でも機運が高まる事が期待されている (Khalil 2021: 20)。ユネスコ条約は未批准である。

イエメン

2009年にはエクスター大学がイエメン沿岸部の港の調査を実施し、このプロジェクトを契機に、国内でも水中文化遺産の取り組みを進める動きが見られた。水中文化遺産を扱う部署の設置、また、組織内で考古学ダイバーのトレーニングも計画された。2012年には、バハレーンで開催された湾岸諸国のユネスコ条約

会議に出席している (Khalil 2021: 21)。しかし、その後の国内情勢の混乱により現在は進展が見られない。

アラブ首長国連邦

周囲の国々が水中文化遺産保護の政策を進める中、取り組みがなかなか見えてこない国となっている。ユネスコ条約は未批准であるが、他国の例を見る限り連邦国や地方行政が発達した国は批准に時間を要する傾向が見られる。アラブ首長国連邦が水中文化遺産保護への理解を示していないとは言い切れない。政府機関内で水中文化遺産に携わる職員は若干名おり、大学や民間団体でも時折講義などが組まれている (Khalil 2021)。ダイビング産業が盛んであり、世界最大級の水深 60 m プールを利用したダイビングアトラクシヨ

ン、ディーブ・ダイブ・ドバイが2021年にオープンした (Deep Dive Dubai 2023)。水没都市などのアトラクションのほか、テクニカル・ダイビングのトレーニングなども可能な施設となっている。民間からの動き次第では、即急に国としての体制をまとめる必要が出てくるかもしれない。2011年からサウスハンプトン大学がアブダビを中心に沿岸域の遺跡の登録を目指した踏査と探査を実施し、イスラム時代の遺跡が報告されている (Blue et al. 2013)。

(2) アフリカ アルジェリア

アルジェリアの水中遺跡調査は1968年に始まる (Yorke and Davidson 1969)。初期は海外研究者が主体となる調査が多かったが、近年は地元の考古学者と協力、もしくは地元の研究者が主体となり、すでに400件近い水中遺跡が確認されている²⁾。著名な遺跡としては、ローマ時代のカエサリア・マウレタニアにあるシェルシェル (Cherchell) 遺跡がある。遺跡の一部が水没しており、潮間帯から水深1mほどの場所に様々な構造物が見られる。岩盤の一部をくり抜いて魚を貯めておくタンクなどは、すでに1960年代に発見・記録されている (Khalil 2023: 24-25)。アルジェリアでは、水中遺跡の保護・調査に三つの機関 (国立海事博物館、国立考古学リサーチセンター、国立水中考古学コミッション) が関わっている (Khalil 2021: 12)。2015年にユネスコ条約を批准し、国際的なプレゼンス、国内の体制の整備、研究など順調な進展を遂げている。国内の教育に関しては、モルスリ・アブデラ大学で水中考古学専門プログラムの設立を目指しているという情報もある (Khalil 2021: 12)。

エジプト

エジプトは、アラブ諸国の中で特に水中文化遺産の調査や保護に対する取り組みに積極的であり、地域のリーダーとしての存在感を示しているが、その発展の歴史は様ではない。2017年にユネスコ条約を批准しており、アラブ諸国の中でも特に早いわけではない。水中遺跡調査の歴史は古く20世紀初頭にまで遡り、その後にもいくつかの機会がありながらもなかなか海の遺跡へと目を向けることがなかった (Khalil and Mohamed 2002)。海外の調査隊の随行、また、独自の調査機関として、1996年に国内の水中遺跡管理を行う部署として観光文化省のもとに水中古物部門 (Department of Underwater Antiquities: DUA) が設立され、現在、およそ30人の専門員が所属している (Khalil 2021: 13)。

水中遺跡調査がエジプト国内で活発になるには、外国の調査隊の活躍が大きい。エジプトの水中遺跡といえ

ば、アレキサンドリアの遺跡—ファロスの灯台、別名アレキサンドリアの大灯台 (The Pharos Lighthouse)—が真っ先に思いつく。紀元前300年ごろから建設が始まった灯台の高さは100mを超えていたと言われ、14世紀の地震で壊滅した。灯台と水没した町の調査はヨーロッパ (主にフランス) の研究者が主体となり数十年継続して行われている。1994年以降は、フランス文化省のサポートを受けて設立されたアレキサンドリア研究センター (The Centre d'Études Alexandrines: CEAlex) が調査主体となっている (Empereur 2024)。灯台の他に、アレキサンドリア湾内には水没した町が発見されており、フランスの考古学者フランク・ゴッディオ (Franck Goddio) が自ら設立した非営利団体 (The Institut Européen d'Archéologie Sous-Marine: IEASM) を中心に調査が行われている (Goddio et al. eds. 1998)。国や大学ではなく財団による調査という特殊な体制であり、地域内では例を見ないプロジェクト予算・調査規模を誇る³⁾。すでに、25,000 m² 以上のエリアの三次元測量が完了しているという (Khalil 2023: 10-15)。また、アレキサンドリアから30 km離れたアブキール湾では水没した都市ヘラクレイオン (The ancient towns of Canopus and Thônis-Héracléion) の調査も行われている。周辺の海域で60隻以上の沈没船を確認しており、特にプトレマイオス朝時代の船が多い (Robinson and Goddio 2015)。国民の間にも水中遺跡の存在を広める機会となっている。アレキサンドリア湾などエジプトの水中遺跡から出土した遺物を集めた『海のエジプト展』が2009年に横浜で開催され話題を呼んだ (朝日新聞社 2023)。

エジプトの水中考古学が他のアラブ諸国に比べ大きく進展している理由は、教育や次世代の育成に力を入れている点であろう。2009年には、アレキサンドリア大学がイギリスのサウスハンプトン大学や非営利団体などと協力して地域初となる水中・海事考古学に特化した大学院プログラムを発足させている⁴⁾。今ではユネスコと協力して地域のトレーニングセンター、学術研究の集約の場として大きな影響力を持っている。このセンターのチームによる発掘も各地で実施されている。マルサ・バゲーシュ (Marsa Bagoush) 遺跡では、紀元前2世紀から19世紀のイギリス船まで、40点以上のいかり (アンカー) が発見された。ローマ時代の構造物や遺物も特定している。その他、紅海では欧州諸国の船など数隻の沈没船の調査が進んでいる (Khalil 2023: 16-20)。

リビア

ニコラス・フレミング (Nicholas Flemming) がアポロニア (Apollonia) 水没遺跡の調査を実施した

のが 1958 年であり、その後も何度か水中遺跡の調査は計画・実施されている (Pizzinato and Beltrame 2012)。リビアの特徴として、典型的なトップダウンにより水中文化遺産保護が進められたことにある。カダフィ氏の先導のもと、2005 年にアラブ諸国の中で最初にユネスコ条約を批准した国であり、同時に法律の整備も進んだ。現在は、国内情勢が不安定のため情報の入手が困難であり、ここでの記述は現在の状況を必ずしも的確に表しているわけではない。アポロニアの現状については、論文やレポートなどで確認することができる (Catani et al. 2020)。また、アレキサンドリア大学の水中考古学プログラムにリビアからの学生が在籍していたこともある (Khalil 2021: 16)。さらに 2010 年にはユネスコ・トレーニングに参加するなど、水中遺跡保護の活動は継続して続けられている。国内が不安定でありながら、アマチュアのダイビング団体などが調査を実施している。近年、水中遺跡調査ユニットが設立された (Khalil 2021: 15)。

モーリタニア

モーリタニア政府は、ユネスコ条約の批准を進めていると長い間表明してきた。国内法の改定により水中文化遺産の保護を明記するなど経過が見られた一方で、国内の調査事例も見られず、専門家もいない状況にあった (Khalil 2021: 16)。2023 年にはユネスコ条約の批准に至り、今後は具体的な対応が望まれている。

モロッコ

1960 年代から、ラバト周辺海域で度々水中遺跡発見の報告があり、鉛のインゴットやアンフォラを積んだ木造船などが知られている。しかし、本格的に水中遺跡調査が開始されるのは、1990 年代に入ってからとなる。特にアメリカ、イギリス、デンマークなど海外の大学や研究機関との共同研究というプロジェクトによる調査がモロッコ北部を中心に実施された (Erbbati and Trakadas 2008)。その後、比較的早いペースで国内の体制の整備を進め、2011 年のユネスコ条約の批准前後から国内で水中文化遺産保護の機運が高まっている。文科省の下で文化庁の中に考古学ダイビングチームを設立し、水中遺跡の把握と登録を主な業務として実施している。2010 年以降、相次いで沈没船遺跡が数件報告され、各地で潜水を含む探査プロジェクトを行っている。ただし、国内では専門で水中文化遺産について学べる大学などの専門団体がないため、本格的に学ぶには海外の大学に進む必要がある (Khalil 2021: 16-17)。MarEA のインターネット・ページから、モロッコや周辺諸国の様々な活動を知ることができる (MarEA 2020)。また、リビアンスタディーズ (Libyan Studies) 2023 年最新号には、モ

ロッコの水中文化遺産保護の取り組みとして、海面上昇や開発などによる破壊の危機にある水際の遺跡を、データベースの作成と遺跡の登録を通して守る例が詳しく紹介されている (Trakadas and Karra 2023)。

スーダン

紅海には多くの水中遺跡が存在していると想定されるが、これまで国や市民からの積極的な水中文化遺産保護の取り組みは見えてこなかった。紅海の水中遺跡調査を見ると、エリトリアで発見された 7 世紀のアサルカ沖沈没 (The Black Assarca shipwreck) は 7 世紀と古く (Pedersen 2008)、その他には上述したエジプトやヨルダンの調査などが知られる。対岸のサウジ・アラビアも調査を本格化したことを受け、スーダンでも調査が進むことに期待が持たれている。また、ナイルダムの底にも遺跡が残されていると言われ、調査の必要性を唱える者もいる (Khalil 2021: 19)。紀元前 7 世紀から 4 世紀ごろのヌリのピラミッド (Nuri Pyramids) 周辺の地下水位の上昇により、低層部が水没したピラミッドが「水中遺跡」として話題を呼んでいる (Romey 2019)。遺跡の保存を考えると芳しくない状況にある。政府が水中文化遺産の保護に積極的に取り組みを進める意向を示しているが、国内に専門家がいらない、水中遺跡の分布・把握も進んでいないなど課題が残されている (Khalil 2021: 19)。ユネスコ条約は未批准である。

チュニジア

古くは、1907 年に発見されたマフディア沈没船 (The Mahdia Shipwreck) の調査は良く知られている。フランス隊が中心となり調査が実施されている。アラブ諸国の中で、特に積極的に水中文化遺産の調査を進め、ユネスコ条約の取り組みにも関わり、水中遺跡保護の国際的なリーダーシップを発揮している。水中文化遺産の管理は、国立遺産局の中に設けられた水中考古学部門が受け持つ。水中考古学部門は、ダイビングクラブなどと協力して市民にも水中遺跡調査のトレーニングを実施し、広く水中文化遺産保護の取り組みを広めるための活動を実施している。独自の調査を進めているほか、国際協力事業も実施している (Khalil 2021: 20)。2010 年以降、イタリアのサッサリ大学と合同で西暦 365 年の地震と津波により壊滅した都市ネアポリス跡地 (Neapolis) の探査をハンマメット湾で実施している。ネアポリスは、ガラム (古代ローマの魚醤) の一大生産地であったと伝わる。これまでの探査で、町の通りの跡、いくつかのモニュメント、また、魚を漬け込むためのタンクが発見されている (Khalil 2023: 29-30)。



図3 ユネスコ水中文化遺産保護条約・スカーキーバンクのプロジェクト紹介ページ (UNESCO Convention on the Protection of the Underwater Cultural Heritage 2023)

3. 国際的な取り組み

最後に、国際的な取り組みを紹介したい。アラブ地域内ではユネスコ主催のワークショップやトレーニングが開催されているが、近年最も話題をさらった国際プロジェクトがスカーキー・バンク (Skerki Bank) の国際調査プロジェクトである。スカーキー・バンクは、チュニジアとシチリア (イタリア) の間の公海に位置する。複雑な海底地形が特徴の海域で古代の交易ルートにあたる海の難所でもあった。1989-97 年にかけて、タイタニック号を発見したロバート・バラード (Robert Ballard) を中心としたチームが当時最新鋭のソナーや水中ロボットを使用して、水深 850 m にあるローマ時代の沈没船から近現代の船まで複数の沈没船を発見している (Ballard et al. 2000)。バラードの調査以降、学術調査の必要性が訴えられてきた。しかし、これらの沈没船はいわゆる深海に位置し、当時の技術では発掘はおろか記録さえも困難であり、国家的規模の調査体制を必要とした。さらに、ちょうどユネスコ条約の素案が形をみせつつある時期にあり、国際水域における水中遺跡調査や保護の枠組みが構築される以前の段階であった。その後、ユネスコ条約が国際的にも認知され、水中文化遺産の保護が国の文化政策において重要な位置を占めるようになった。スカーキー・バンクと文化・歴史的なつながりの強い国々が条約を批准し、また、深海探査技術や水中ロボット技術の向上もあり、2010 年代以降、再びスカーキー・バンクの遺跡調査の必要性が唱えられるようになった。

2022 年、チュニジアとイタリアが先導する形で周辺諸国および歴史的なつながりのある 8 か国 (チュニジアとイタリアの他、アルジェリア、クロアチア、エジプト、フランス、モロッコ、スペイン) を集め、共同でスカーキー・バンク周辺海域の探査プロジェクトへの参加を呼びかけた (Khalil 2023: 32)。ユネスコ条約の事務局が主体となりチュニジアを調整国として国際プロジェクトが組織された (UNESCO Convention on the Protection of the Underwater Cultural Heritage 2022)。2023 年、フランスの水中考古学調査船アルフレッド・メルラン号 (Alfred Merlin) に 8 か国から合計 20 名以上の科学者が乗船し、遺跡の探査、マッピング、水中ロボットによる目視確認調査を実施した (図 3)。この調査で複数のローマ時代の沈没船、19 世紀の沈没船などを確認している (UNESCO Convention on the Protection of the Underwater Cultural Heritage 2023)。公海においてユネスコ条約事務局が主体となり実施したプロジェクトは、これが初めての試みである。もちろん、8 か国ともユネスコ条約を批准しており、国境という枠を超えた新しい遺跡調査の在り方を示した。

註

- 1) ダイビング観光客を誘致するため、船などの人工物やボーイング 747 を沈めて一般公開している。Dive Bahrain. <https://divebahrain.com/> (2023 年 11 月 28 日閲覧)
- 2) アルジェリアの近況について詳しくは、以下を参照。
Khellaf, R. Underwater Archaeology in Algeria. *The Nautical Archaeology Digital Library*. <https://>

- shiplib.org/index.php/landscapes/africa/underwater-archaeology-in-algeria/ (2024年2月20日閲覧)
- 3) Institut Européen d'Archéologie Sous-Marineのウェブサイトでプロジェクトが紹介されている (Institut Européen d'Archéologie Sous-Marine 2023)。
- 4) 地域唯一の水中考古学に特化したプログラムであり、高い評価を受けている。海外の様々な団体から支援を受けて設立された (Alexandria Centre for Maritime Archaeology and Underwater Cultural Heritage 2020)。
- 参考文献**
- Al Boom Diving 2024 PADI Underwater Archaeology Diver Distinctive Course. <https://www.alboomdiving.com/activity/padi-underwater-archaeology-diver-course.html> (2024年2月20日閲覧)
- Alexandria Centre for Maritime Archaeology and Underwater Cultural Heritage 2020 *UNESCO Online Training of Trainer on the Underwater Cultural Heritage Management for Sustainable Developments in the Arab States*. <http://www.cmauch.org/unesco-online-training-of-trainers-tot-on-the-underwater-cultural-heritage-uch-management-for-sustainable-developments-in-the-arab-states/> (2023年11月28日閲覧)
- Arab News 2021 *Saudi Arabia's TRSDC to Deliver First Underwater Excavation on the Red Sea Coast*. <https://www.arabnews.com/node/1973611/business-economy> (2023年12月2日閲覧)
- Ballard, R., A. McCann, D. Yoerger, L. Whitcomb, D. Mindell, J. Oleson, H. Singh, B. Foley, J. Adams, D. Piechota and C. Giangrande 2000 The Discovery of Ancient History in the Deep Sea Using Advanced Deep Submergence Technology. *Deep Sea Research Part I* 47: 1591-1620.
- Blue, L. 2020 *In the Footsteps of Honor Frost: The Life and Legacy of a Pioneer in Maritime Archaeology (Honor Frost Foundation General Publication)*. Leiden, Sidestone Press.
- Blue, L., K. Strutt, P. Sheehan, P. Jackson and M. Beech 2013 Developing an Integrated Policy for the Maritime and Coastal Heritage of the UAE: A Collaborative Approach. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 43: 63-76.
- Catani, E., F. Pallotta, D. Paltrinieri and E. Stortoni 2020 Coastal and Archaeological Sites of Libya: Apollonia Protection Project. In O. Menozzi (ed.), *Archaeological Mission of Chieti University in Libya: Reports 2006-2008*, Vol. 1, 5-20. Oxford, Archaeopress.
- Deep Dive Dubai 2023 The World's Deepest Swimming Pool for Diving. *Deep Dive Dubai*. <https://deepdivedubai.com/> (2023年12月2日閲覧)
- Eid, E., S. Al-Fakhri and I. Sliem 2018 Aqaba Marine Heritage Project. In D. M. John, B. A. Porter and C. P. Shelton (eds.), *Archaeology in Jordan Newsletter: 2016 and 2017 Seasons*, 98-99. Amman, The American Center of Oriental Research.
- Empereur, J. Y. 2024 French Excavations Abroad Alexandria (Egypt). *Underwater Archaeology*. <https://archeologie.culture.gouv.fr/archeo-sous-marine/en/alexandria-egypt> (2024年2月20日閲覧)
- Erbati, E. and A. Trakadas 2008 *The Morocco Maritime Survey: An Archaeological Contribution to the History of the Tangier Peninsula*. BAR International Series 1890. Oxford, Archaeopress.
- Al-Fakhri, S. 2010 Jordan: National Report on Underwater Cultural Heritage. *UNESCO Regional Meeting in Istanbul 25-27 October, 2010*. <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000189964>. (2023年11月28日)
- Goddio, F., A. Bernand, E. Bermanad, I. Darwish, Z. Kiss and J. Yoyotte (eds.) 1998 *Alexandria: The Submerged Royal Quarters*. London, Periplus.
- ICCROM 2022 Saudi Ministry of Culture Completes the Underwater Cultural Heritage Training Program. *ICCROM*. <https://www.iccrom.org/news/saudi-ministry-culture-completes-underwater-cultural-heritage-training-program> (2023年12月2日閲覧)
- Institut Européen d'Archéologie Sous-Marine (IEASM) Introduction / Sunken Civilizations. *IEASM*. <https://www.franckgoddio.org/projects/sunken-civilizations/introduction/> (2023年11月28日閲覧)
- Institute of Oriental Studies of the Russian Academy of Sciences 2022 News: The Third Season of International Syrian-Russian Underwater Archeological Expedition. *IVRAN*. <https://www.ivran.ru/en/news?artid=210271> (2023年12月2日閲覧)
- Khalil, E. 2017 The Potentials of Maritime Archaeology in the Kingdom of Saudi Arabia. In D. Agius, E. Khalil, E. Scerri and A. Williams (eds.), *Human Interaction with the Environment in the Red Sea*. Selected Papers of Red Sea Project VI, 348-363. Brill. doi: 10.1163/9789004330825_016.
- Khalil, E. 2021 *Report on Underwater Cultural Heritage Education and Training in the Arab Region*. <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000375262>.
- Khalil, E. 2023 *Underwater Cultural Heritage in the Arab States Region*. <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000384235>.
- Khalil, E. and M. Mohamed 2002 Underwater Archaeology in Egypt. In C. V. Ruppé and J. F. Barstad (eds.), *International Handbook of Underwater Archaeology*, 519-534. The Springer Series in Underwater Archaeology. Boston, MA, Springer.
- Lebedinski, V., D. Tatarkov and J. Pronina 2020 Underwater Archaeological Research off the Coast of the Syrian Arab Republic: History and Modern Research. *Vostok. Afro-Aziatskie obshchestva: istoriia i sovremennost* 5: 68-81.
- Maarleveld, T., U. Guerin and B. Egger (eds.) 2013 *Manual for Activities Directed at Underwater Cultural Heritage: Guidelines to the Annex of the UNESCO 2001 Convention*. Paris, UNESCO.
- MarEA 2020 Maritime Heritage. *Maritime Endangered Archaeology in the Middle East and North Africa*. <https://marea.soton.ac.uk/maritime-heritage-threats/> (2023年12月1日閲覧)
- MarEA_project 2023 *Maritime Endangered Archaeology*. https://twitter.com/MarEA_project (2023年12月1日閲覧)
- Mearns, D., D. Parham and B. Frohlich 2016 A Portuguese

- East Indiaman from the 1502-1503 Fleet of Vasco da Gama off Al Hallaniyah Island, Oman: An Interim Report. *The International Journal of Nautical Archaeology* 45(2): 331-350. doi: 10.1111/1095-9270.12175.
- Nugali, N. 2020 Saudi Arabia Sets up Center for Underwater Cultural Heritage in Red Sea, Arabian Gulf. *Arab News*. <https://www.arabnews.com/node/1758656/saudi-arabia> (2024 年 2 月 20 日閲覧)
- Oron, A., E. Galili, G. Hadas and M. Klein 2014 Two Artificial Anchorages Off the Northern Shore of the Dead Sea: A Specific Feature of an Ancient Maritime Cultural Landscape. *International Journal of Nautical Archaeology* 44: 81-94. doi: 10.1111/1095-9270.12077.
- Pedersen, R. 2008 The Byzantine-Aksumite Period Shipwreck at Black Assarca Island, Eritrea. *Azania: Journal of the British Institute in Eastern Africa* 43: 77-94.
- Pedersen, R. 2015 A Survey for Shipwrecks, Submerged Settlements and Seafaring Technology in Bahrain. In S. Tripathi (ed.), *Shipwrecks around the World: Revelations of the Past*, 156-175. New Delhi, Delta Book World.
- Pizzinato, C. and C. Beltrame 2012 Technical Briefing: A Project for the Creation of an Underwater Archaeological Park at Apollonia, Libya. *Underwater Technology* 30: 217-224. doi: 10.3723/ut.30.217.
- Robinson, D. and F. Goddio 2015 *Thonis-Heracleion in Context*. Oxford Centre for Maritime Archaeology Monograph 8. Oxford, University of Oxford.
- Romey, K. 2019 Dive Beneath the Pyramids of Sudan's Black Pharaohs. *National Geographic*, July. <https://www.nationalgeographic.com/culture/article/dive-ancient-pyramid-nuri-sudan> (2023 年 12 月 2 日閲覧)
- Ruttkay, M., B. Kovár and K. Pieta (eds.) 2019 *Archaeology of Failaka and Kuwaiti Coast - Current Research*. Institute of Archaeology, Slovak Academy of Sciences. National Council for Culture, Arts and Letters. Kuwait City, Nitra.
- Schiattarella Associati 2016 *QUAM - Qatar Underwater Archeological Museum*. <https://www.schiattarella.com/quam/> (2023 年 12 月 2 日閲覧)
- Trakadas, A. and A. Karra 2023 Maritime Cultural Heritage in Morocco: Context and Perspectives. *Libyan Studies* 54: 151-159.
- UNESCO 2001 Convention on the Protection of the Underwater Cultural Heritage. UNESCO. <https://www.unesco.org/en/legal-affairs/convention-protection-underwater-cultural-heritage#item-2> (2024 年 2 月 20 日閲覧)
- UNESCO Convention on the Protection of the Underwater Cultural Heritage 2022 *Archeological Expedition to Explore Shipwrecks in the Skerki Bank*. <https://www.unesco.org/en/articles/archeological-expedition-explore-shipwrecks-skerki-bank> (2023 年 12 月 2 日閲覧)
- UNESCO Convention on the Protection of the Underwater Cultural Heritage 2023 *Underwater Archaeological Mission for UNESCO and 8 Member States in the Mediterranean*. <https://www.unesco.org/en/skerki-bank-mission> (2023 年 12 月 2 日閲覧)
- Ward, C. 2001 The Sadana Island Shipwreck: An Eighteenth-Century AD Merchantman off the Red Sea Coast of Egypt. *World Archaeology* 32(3): 368-382.
- Westley, K., N. Carayon, J. Anbar, C. Breen and L. Blue 2022 Maritime Cultural Heritage, Coastal Change and Threat Assessment in Syria. *Journal of Maritime Archaeology* 17: 353-373. doi:10.1007/s11457-022-09339-y.
- Wonders Travel and Tourism 2023 Underwater Military Museum-Aqaba. *Wonders Travel and Tourism*. <https://jordan-travel.com/underwater-military-museum-aqaba/> (2023 年 12 月 1 日閲覧)
- Yorke R. and D. Davidson 1969 Roman Harbours of Algeria. *Underwater Association Report* 1969: 8-21.
- Cable News Network 2022 「3400 年前の古代都市、ダムの中から出現 極端な干ばつで水位が低下 イラク (6 月 21 日)」 <https://www.cnn.co.jp/fringe/35189226.html> (2023 年 11 月 28 日閲覧)
- 高野晋司・松村恵司(編) 2000『遺跡保存方法の検討：水中遺跡』文化庁。